

# JICA ボランティア 千葉

SV ニュース  
第 6 号

## 第四回定例会開催



品川会長挨拶

第四回定例会が十二月九日（土）午前十時から正午まで、プラザちばにて開催されました。出席は会員三十七名で、来賓として社団法人青年海外協力協会会長金子洋三氏、千葉県総合企画部政策調整担当部長中沢則夫氏、千葉県総合企画部国際政策グループ早川夏子氏とJICA千葉県国際協力推進員大山美砂子氏を迎えました。

品川会長の開会の挨拶と来賓の紹介の後、金子洋三氏から「ボランティアは帰国後の活動が本番」、中沢則夫氏から「国際化は足元から」との



写真左から 中沢則夫氏、金子洋三氏

演題で講演を頂きました。講演の内容は本紙二、三頁に掲載してあります。



定例会会場風景

次いで、上田事務局長より「平成十八年度上期活動報告」、山本茂穂幹事より「当

平成十九年度通常総会日程  
日時 五月二十六日（土）  
午前九時半～正午  
引き続き懇親会を予定  
千葉市国際交流プラザ  
会場

会のホームページ開設について、増田定雄幹事より「国際理解（開発）教育の推進状況」の報告が行われました。（ホームページ開設については三頁下段、国際理解（開発）教育については十頁上段に関連記事があります。）

最後に上田事務局長から、秋帰国シニアボランティア十四名の紹介が行われ、懇談会に移行しました。



上田事務局長の活動報告

司会は黒田副会長、書記として齋藤健会員および大西周作会員があたりました。

黒田副会長の閉会挨拶の後、恒例の派遣地域別懇親会に移動し、各会員の体験談、情報提供に一層の盛り上がりが見られました。



皆様ご承知のとおり、「JICA地球ひろば」は昨年四月に開設され、お陰様

### 特別寄稿

### JICA地球ひろばの目指す市民参加協力事業について

独立行政法人 国際協力機構 広尾センター  
業務グループ長 松本 淳

その意味で千葉県では貴会のような活動があり、市民が主体となった活動の好事例として益々発展して戴けますようお願い申し上げます。

他方、皆様ご案内のとおり、国際協力に「積極的な関心を有する」市民層は五割、「まあまあ関心ある」としていただけているのは三割程度と言われております。これは、「国際協力」「国際開発」など言葉の硬さともに関係なく、国際協力の実情が内々に伝えられていないことも一因と思われま

と考えるべきです。各地域での市民参加協力事業につきましては、JICA東京とJICA八王子で培ってきたネットワークを引き継ぎ、限られた予算と人員（本年度二名削減されておりあります）をより効率的・体系的に投入することが求められております。そこで、地域別に向こう三カ年を見越した戦略を策定する試みを行っており

ます。近年の市民団体やNGOとの連携におきまして、皆様からの発意によって日本と開発途上国との問題に関心をもち、その解決・改善に向かって何かしら行動を起こして戴ける事例が出てきていますように思われます。JICAが押し着せるのではなく、JICAの持つ情報と場を提供することによって促進されております。

わたしたちの使命があると考えております。これまで見られてきた縦割りのような垣根を取り払い、市民、団体、JICAとで対等で自立的な関係を築き、「生活」と「国際」を結びつけ、参加して楽しい活動を実現したいと思っております。皆様は今後一層のご指導ご鞭撻を上げます。

来賓講演要旨

JICAボランティアは  
帰国後の活動が本番

(社)青年海外協力協会  
会長 金子洋二



青年海外  
協力協会  
J O C A  
は、青年海  
外協力隊の  
帰国隊員が  
中心となつ

て結成した公益法人で、海外ボランティアとしての経験を社会に還元する様々な活動を展開しています。皆様方には、J O C A が J I C A から委託を受けて実施しており、まずシニア海外ボランティアの募集説明会等で大変お世話になっております。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

『ボランティア事業における活動成果とは』

J I C A ボランティア活動の目的といえば、当然のことですが、途上国の人たちのお役に立つことであり、現地での活動の成果に関心が向くのは当然でしょう。シニアボランティアも協力隊も、O D A による技術協力の一環として位置づけられているので、参加するボランティア自身も、また一般の方々も『現地活動

の成果・効果』を強く意識します。

しかし、歴史、文化、環境を異にする社会での協力活動は、二年や三年の短期間で目に見える成果が挙がるほど容易なものではなく、多くの関係者の長期にわたる地道な活動があつて初めて効果が現れるものです。多くのボランティアが駆伝のように「たすき」を受け継ぎながら、現地の人たちとじっくり付き合ひ、互いに心を通わせて、現地の社会風土に根付く技術・技能を人々とともに作り上げていくプロセスこそが、ボランティアによる技術協力の本来の姿だと思います。

中には二年の任期の間ですばらしい協力成果を挙げる例もありますが、そうした場合でも、よく調べてみれば、その人の活動に先立つ先人の長い間の地道な努力と現地の人たちのご苦労があつて、ようやくその機が熟し、花が開いたということがほとんどです。任期中だけを考えれば、大多数の人は目にみえる華々しい成果を上げて帰国されるわけではありません。だからといって、これらのボランティアの活動は決して失敗だったわけではなく、それぞれが目立たないがとても重要なプロセスの一部を分担しているのです。

『ボランティアが現地で学ん

でくもるもの』

ボランティア事業の成果として、日本と任国の間の相互理解の促進ということはこれまでもよく言及されてきたことです。ボランティアは、自分たちとは異なる考え方をする人たちに囲まれて暮らす中で、彼らの文化を学び、また彼らに日本の文化を伝えます。ボランティアが、現地社会の一員たらんと悪戦苦闘する日々は、実は同時に自分自身のこと、自分が生まれ育つた社会のことを真剣に考える時間でもあります。自分たちの社会と対比しながら任国の理解しようとする努力し、またその任国を鏡に自分たち自身の姿を見るわけです。こうして、ボランティアは現地の人たちとともに暮らす中で、自分たちの国について、世界について新しい視点を獲得して帰国するのである。

日本は島国で、歴史的に他国との接触が限られていたせいか、自分たちの国は他の国々よりすぐれていると考える逆、逆に過度に自虐的になつてここが悪い、あそこが悪いと卑下したりと、自国の評価が両極端に分かれる傾向があるように思います。外から日本を眺める経験は、他の社会と見比べることによって日本の良いところ、悪いところを冷静に把握し、バランスの取れた見方をもたらし、

れます。

これは、日本社会にとつて、海外ボランティア事業が生み出すもうひとつの大変有益な成果といえるのではないのでしょうか。国の支援を受けて活動したボランティアとして、自分たちを送り出してくれた日本の社会に対し、その成果を還元する意味でも、帰国ボランティアによる一味違つた社会的な活動は、これからの日本にとって大きな意味を持つと思います。J O C A は、公益法人としてこうした帰国隊員の社会還元活動を積極的にサポートしています。今後はシニアの皆さんとも連携を強め活動の輪を広げていきたいと考えています。

国際化は足元から

千葉県庁政策調整担当  
部長 中沢則夫



千葉県庁  
に出向する  
に際し、知  
事から特別  
に受けた  
ミッション  
の一つが、

「千葉県の国際化に尽力せよ」ということでした。耳に親しみやすい響きの言葉だったので、実際に具体的に施策を立案する段になつて、

「さて、『国際化』って何だろう？」と頭を抱えてしまいました。まして、「千葉に求められる国際化とは？」など、どこから手をつけていいのか雲をつかむような思いで私の仕事が始まりました。

ところで、日本人は「国際化」という言葉に弱い民族です。司馬遼太郎先生の遺作となつた「この国のかたち」の冒頭の部分に、「日本人は、いつも思想はそこからくるものだと思つている」という一節があります。過去の歴史をみるとこの言葉の含蓄の深さが分かります。朝鮮、中国、ポルトガル、オランダ、ドイツ、英国、米国と長い歴史の中で常に外来の思想・文化を受け入れてきました。これは、島国であるという地理的な条件だけで説明できるものではなく、世界最先端の経済大国になつてもその傾向は変わっていません。

私見では、明治以降の日本でも最も国際的であったのは、日露戦争に至るまでの明治中盤であり、その次に昭和初期いわゆる戦争に明け暮れていた時期であり、そして昭和の高度成長期であったと考えています。逆説的な言い方になりますが、今の日本は、「国際化」という観点からは、どんどん後退しているように感じています。英語を話す人は増えているし、海外旅行者

数も年々増えていますが、どこか表面的で深みがなく、本当の意味での国際性は衰えてきていないでしょうか。

真の国際化とは何か？ 国際化の本質は、「異文化を知り、相互に尊敬しあうこと」である、と私は考えております。このことが、異文化との平和共存を目指し、相互の不足を補うことにつながるわけです。国際人の条件を「語学力」、「笑顔」、「アイデンティティ」と定義してみます。「語学力」は説明不要でしょうが、国際人にとってはその能力を発揮する手段にか過ぎません。「笑顔」は見知らぬ人・風俗慣習の異なる民族との間で心を開き通じ合う基本になることです。寛大な心の表れともいえるでしょう。そこで「アイデンティティ」です。なかなか日本語になりにくい言葉で、「同一性」とか「一致」とか「身元」とか翻訳されますが、この場合、「帰属意識（あるいは民族意識）」という言葉が適当ではないでしょうか。人々の日々の営みの総体が「文化」です。自分のことをよく理解している人が、相手の事情もまたよく理解できるものです。彼我の違いをよく知るためにも、自分のアイデンティティを持ち、自分の文化を知り尽くしていることが必要です。そして、そういう

自分の価値をよく分かり、語れる人こそが国際社会で活躍できるものです。

日本人という単位でアイデンティティをもつことのひとつに「愛国心」があります。かつての不幸な歴史の中で、素直に愛国心を持つ気持ち歪めてしまったのは残念なことです。それでも多くの人が自分の生まれ育った郷土を愛していることでしょう。その土地の歴史、文化に誇りをもち、愛情を注ぐことができのならば、その人は八割方は国際人の資格があると思っております。

最後に、私の好きな言葉をひとつ紹介します。「一隅を照らす、即ち国の宝なり。」天台宗の開祖・最澄法師の言葉です。「国際化は足下をよく知ることから始まる」というのが、私の確信に近い信条です。

〔編集部注〕

千葉県では平成十八年二月に「世界にひらくちから」と題して「明日のちばを拓く十のちから」が策定されております。

内容は「背景と課題」、「国際化の概念」、「中長期的に目指す方向」、「三つの理念」、「四つの分野」、「五つの効果」の三項目から成っております。

会員 動 静

〔新会員紹介〕  
平成十八年十月以降の新会員は次の方々です。（敬称略）

- 浦山和良 エジプト 市原市
- 黒須英典 アルゼンチン 船橋市
- 佐山清司 チュニジア 浦安市
- 白鳥貞夫 バヌアツ 柏市
- 津田正臣 ヨルダン 千葉市
- 寺島得司 ブータン 八千代市
- 羽田 亨 パキスタン 柏市
- 濱崎 丘 ヨルダン 柏市
- 及川淳一 ドミニカ 船橋市
- 加藤哲男 社会基盤一般 船橋市
- ペルー 食品工業 流山市

〔再派遣で活躍中の方々〕

- 大格 登 ヨルダン 都市衛生
- 柏尾英彦 サモア 海運・船舶
- 木内良郎 メキシコ 鉄鋼・非鉄金属
- 北垣勝之 ヨルダン 人的資源一般
- 小松英世 ボリビア 水資源保護
- 菅井啓祐 ドミニカ 総合地域開発
- 須郷隆雄 ブータン 農業経営
- 高木利公 タイ 情報・広報
- 豊永俊之 チュニジア 教育
- 福井凱男 マラウイ 一村一品運動
- 藤田俊夫 パキスタン 商業経営
- 〔平成十九年三月再派遣〕
- 及川淳一 ボリビア 道路建設機械
- 浦山和良 マラウイ 品質管理
- 寺島得司 フィジー 土木施工管理
- 寺田博義 タイ 生産工学
- 濱崎 丘 アルゼンチン 環境プロジェクト運営

ウェブページ 開設のお知らせ

昨年十一月一日付で、千葉県 JICA シニアボランティアの会の新しい広報媒体としてウェブページを試行開設することになりました。URLは左側写真のウェブページ「HOME」の下に記載してあります。

当会の広報媒体としては、会報「SV ニュース千葉」（年二回発行）と会員向け会報電子メール版（随時発行）がありますが、広く一般の方々にも当会の活動状況をお知らせするため、ウェブページを立ち上げた次第です。

このウェブページの開設には堀端俊雄会員のご尽力を戴きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。発行までの経緯と更新状況については、ウェブページ上の「更新記録」でご覧いただけます。

（山本茂穂）



<http://chibajicasvob.sv.jocv.net>

会員寄稿

チュニジア大学事情

河合祥雄 (チュニジア)

二〇〇三年十二月、糸杉やユーカリの樹と白い家が印象的なアフリカのチュニスに降り立ちました。

東京と同緯度、北緯三十五度に位置するチュニスは夏は猛暑ですが、北西部の山岳地帯には冬に雪が降ります。南部は砂漠ですが、北部は穀倉地帯であり、また各種の野菜、果物が豊富に栽培されています。この地帯は小高い丘がつついており、春は緑と赤の中に群生するひなげしの赤とのコントラストがすばらしく、フランスの田園地帯を思わせる風景が展開します。

グループコーディネーターとして配属されたのは、チュニス郊外に位置する国立応用科学技術大学であり、各分野に五名のS Vの方が活動されています。

三千三百人の優秀な学生を擁し、教師陣はチュニジア人で、欧米にて学位を取得した方が多く、なかには日本の大学に長年留学された先生もおられました。女子学



河合祥雄先生

生は全体の五十割近くを占めております。この国の女性の活躍は政府機関や教育関係で活発に見られ、当校にても女性の教師が各分野で教えていました。

チュニジアには現在百九十の国立高等教育機関(短大、大学、研究機関)があり、三十六万人強の大学生が学んでおります。授業料は国の負担です。近隣諸国のように石油資源等を持たないこの国は教育に力を注いでおり、数年後には五十万人の学生が高等教育を受けられるようにとの政策が推進されています。

現在四万人の学生が卒業しますが、その多くは卒業後ふさわしい職場が無いのが現状であり、数年後、十万人の卒業生に対応できる適切な職場が創造できるか、否かが今後の課題です。また多くの学生を指導する高度な知識を持った教師の確保も急務となっております。高学歴の就職浪人が大量に増えた場合、不満分子が社会の不安定要因にならぬよう慎重に進めてほしいとする意見もでています。

不十分な実験設備にも拘らず、学生はよく勉強をします。期末試験を参観しました。三名の教官出席のもとで、学生は実験成果の説明とデベートを行います。発表内容、資料作成内容、発表の態度、知識の理解度に分けて

採点され、二十点満点中十一点以上なければ不合格となります。

年度末試験では、全学生の全科目につき点数が公表され廊下に張り出されます。一、二年生では少なからずの留年がみられ、不満足な結果に大声で泣き崩れている女子学生もおりました。

卒業時には、上位成績優秀者は例年女子学生が占めまします。しかし、女子学生にとつて卒業後の道は男子学生以上に厳しく、多くの学生は習得した知識を活用できていないのが現状です。

アラブ系学生の欧米諸国への留学や入国は、以前よりかなり制限が加わり、青年達の夢に歯止めがかけられてい見果てぬ夢に向かい勉学に勤しんでいる状況に接し、つくづく日本の学生は恵まれ過ぎた環境にあるのだ、と痛感した次第です。

国際山岳博物館におけるボランティア活動

竹花 晃 (ネパール)

会社勤めの定年までまだ少し間がある頃、将来のことを考え始めた。このまま、会社で定年まで働くのもよし、また、別の仕事やボランティア



活動もやってみたくも思った。丁度、会社でライフプラン研修というものが

あり、定年後のマネープランと生活設計があり、何とかやっていたと分かった。その研修の帰りに、たまたま開催されたJICAのS V説明会に直行した。その勢いですぐに応募、健康診断、面接選考等、と忙しい日々であった。幸い無事合格、会社に早期定年退職願を提出した。

指導科目はネパールのポカラにできたばかりの「国際山岳博物館運営」である。若い頃、登山に熱中し、ヒマラヤに憧れていた私にとつてはもってこいの場所である。山岳博物館はネパール山岳協会(NMA)により二〇〇四年二月に正式オープンしたばかりであった。世界中の山岳関係諸団体や個人が支援をし、その中でも日本の山岳界からの支援が最大である。私は博物館運営という仕事ではあったが、結局、学芸員の仕事から財務、管理、教育、広報、館長と何でもやった。

さて、ポカラはマチャプチャレやアンナプルナ連山、ダウラギリ、マナスルなどヒマラヤを間近に望む美しい街として有名である。初めてヒ

マラヤを目の当たりにした時には感動したものである。ポカラはトレッキングや観光で栄え、フェワ湖のほとりのレイクサイドにはシーズンには沢山の外国人が見られる。

山岳博物館はネパール最大の広大な敷地に建設され、展示は登山関係と自然史、山の民族と三つのセクションに大別される。オープンに合わせるべく急いで準備されたため、まだやることはいくらかもあった。また、開発途上国のどこでもそうであろうが、母体は金がない。まだ、ここは多少恵まれてい

方であった。最初は経営・管理を主体としたがやや高度すぎ、また成果・形としては現れ難い。スタッフに指導すればできるものと思っていたが、彼らには山や自然史の知識も乏しく、またマネジメントの歴史も浅く、自ら提案・改善しようという土壌にはない。教育・指導もしたが、すぐに根付くのは難しい。二年間で形に残すことも必要なため、自ら資料収集、展示設計、展示物制作、取り付けを行うことにした。その結果、展示物としてはかなり改善され、評価も頂いた。まだ、やりたいことは沢山あったが、残念ながら二年間では限度がある。それでも、過去の仕事の経験や趣味・知識をフルに活かすことができ、充実した楽しい二

年間であった。

また、国の内外を問わず著名人や高官の方も沢山見学に来られ、案内をして面識を得たり、話ができたのも良い思い出である。

## バヌアツ共和国

白鳥貞夫（バヌアツ）

南太平洋に点在する八十三の島々に二十一万人が住むバヌアツ。その知られざる国が、英国シンクタンクが二〇〇六年七月に発表した「幸福度指数」で世界一位にランクされ、日本でも評判になった。小生は二〇〇四年十月から二年間、同国商工会議所で「ビジネス研修事業」拡充を支援する機会を得た。

バヌアツでは今も国民の七割が原始的自給自足の日々をおくり、現金収入のある就業者は一万三千人にすぎない。その商工会議所会員数が五千二百人！の謎解きから小生の活動は始まった。小生が開きただすまで会員名簿を見た所員がいなかった。乏しいデータから分かったことは、



会員の殆どが露天商やタクシー運転手で、製造業の多くはパン職人だった。万

事が「経営」や「管理」から遠い世界で、いったいどんな「ビジネス研修」が役に立つのか、しばし途方にくれた。

勇気づけられたのは、離島民に営農を教える巡回講座がしごとく続いていったことと、都市部でオーストラリア人会計士の講師による簿記コースが立ち上がったことである。

バヌアツの学校では商業を含めビジネスに関する教料がない。当面の活動を、都市部の知的労働者（予備軍を含む）に基礎的なビジネス知識とスキルを与える講座開発に集中することにした。

作成したテキストは「ビジネス入門」、「経営管理」、「商店経営」、「人事管理」、「品質管理」、計三百三ページである。

講師は当初会議所の職員にやってもらったが、彼等にもビジネス経験がなく教え方も素人だった。偶々フイジー大卒の元教師を起用したところ、勘所を押えた講義が好評で、新規講座の殆どを彼女にお願いした。

新企画の一つ、先進国ビジネス事情の啓蒙を目的とした経営者・上級管理者セミナーは、結局小生が講師を務めることになった。日本の経済発展に貢献した手法で、バヌアツでも役立つようなものとして、「品質管理・経営品質」紹介を三回シリーズで行ったと

ころ、追加開講や職場貸切り講座の要請があり、会議所の収入増にも多少の貢献が出来た。

冒頭の「幸福度指数」に戻るが、これは国民の人生満足度、平均寿命と環境破壊のレベルを総合評価したもので、日本は百八十七カ国中九十五位である。この評価には異論もあるが、日本人の「人生満足度」の低さには、高度成長と裏腹に生じた社会の歪みが反映しているに違いない。バヌアツ人は一般に物事の計画や几帳面な管理が不得意で、違約や失敗の追求を殊更に避ける傾向がある。これらはバヌアツの西歐的近代化には阻害要因となるだろうが、過当競争やマネーゲームに歪んだ先進国型のビジネスモデルや手法を真似るべきでないだろう。世界一幸福と評価されたバヌアツ人が、人間味豊かなバヌアツ型ビジネスモデルを自ら創り出し、二十一世紀の人類の幸福に資することを期待したい。

## ヨルダンを振り返って

津田正臣（ヨルダン）

小生が派遣された王立科学院（Royal Scientific Society）は産業振興の技術開発を行うことを目的に開設されたヨルダン唯一の国立研究機関で、



研究設備は近年の日本の無償支援等により充実したものになってい

る。小生の指導科目は金属腐食であったが、当初実験室は無く、場所の選定、設備の導入などに東奔西走し、やっと八ヶ月かかって研究室を開設することができた。以降、帰国直前までカウンタートパートとともに精力的に実験を行ってきた。研究レベルは決して高いものではなく、研究報告書の提出、所内における研究発表会、また国際会議での発表、学会への投稿などもほとんどないといった状況であった。これを改善すべく、RS Sのトップ・幹部およびJICA Aヨルダン事務所所長等を招き、我々SVが研究発表をする報告会を発足させた。これを半年毎に開催し、帰国前の第三回報告会ではSVに加え、三名のカウンタートパートにも発表させた。事あるごとに、「研究報告会の継続」と、「研究員の人事考課システム」を提案してきた。

小生のこのような活動の一部が「ヨルダンのために働く外国人」としてヨルダン国営テレビで放映されたことは、本当によい記念になった。この国は貧富の差がとても

大きく、近年、とくにイラクの政情不安から多くの難民が入り込み、貧しい人達が増えている。物乞いや、他愛のない小物を売り歩く人々の姿が多く見受けられる。しかしこ

ういった人達に、手を差し伸べる人も比較的多く、何か心が救われる気がする。顔なじみになった八百屋、魚屋、床屋のおやじ達はとても親切で、困っていることはないかと心配してくれる。これも宗教の教えからくることなのだろうか、庶民の町ダウンタウンの商店街、盛り場などへ行っても、脅かされたり、盗まれたり、付きまとわれたりするともなく、また一度も人が殴りあいをしているのを見たこともなかった。全くといってよいほど、嫌な思いや、不安を感じることなく過ごすことが出来た。『国は貧しい』が『心はゆたか』なのだろう。

このように職場以外の多くの人々と接触してきたが、彼らは一様に親切でやさしく、家族・親類、お年寄りを大切にしている。ヨルダンの人々の「優しさ」「心の豊かさ」「家族の温かさ」といったものにふれ、自分が教えてきたことよりもヨルダンの人々から学んだことの方がはるかに多かったような気がする。

イスラムの国での二年間の生活は豊かになった日本の社

会が失いかけてる。何か”を振り返らせてくれた気がする。

### 僻地の子供へ夢を届ける サンタクロース

寺島得司（ブータン）

ヒマラヤの懐に抱かれたチベット仏教を生活の基盤としている小さな王国・ブータン。要請された指導科目は道路建設。道路といっても国道や県道の幹線とは違い、人口の八十五割を占める農民が点在して生活する村落への農道であるが、その農道はヒマラヤの急峻な斜面に建設するまさに山岳道路である。

この国の道路建設技術は、想像以上にお粗末なもので、私に課せられたのは道路建設に関わる測量・設計・積算・施工及び維持保守を中央官庁及び地方勤務の技術者へ伝授する事で、云ってしまえば道路建設に関わる全てを二年間で伝授して欲しいと言う大変な要求であった。



ブータンも他の発展途上国の例に漏れず、財源不足等の為にプロジェクトの数も限られており、学校で学んだ技術が活かされる機会

が少ない状況である為、技術者には実際の現場を経験させる必要があると考え、実際に計画されているプロジェクトの現場で徹底的にOJTに依る教育を行った。

道路建設の最初のステップは測量である。OJTの最初の数日間は農道完成後の受益者である農民の民家に泊り込み早朝から日暮まで彼らの協力を得て路線決定の為の測量作業を行う。作業中農民は尊敬の念を持って接してくれ、最終日には手を合わせ感謝の念を表して送ってくれる。技術者冥利に尽きるとはこの事だろう。

この期間中には、農民や地域にある学校の先生達・子供達との日常的な触れ合いがあり、それを通して地域が抱える問題を知らされる。特に私の心に強く響いたのはある地域小学校(community primary school)の先生の言葉であった。『全校生徒三百十二人の三分の一が毎日片道十ないし十二kmの山道を徒歩で通学しており、学校へ来るだけで疲れてしまい、勉学に励むどころでなく、途中で学校に来なくなる子供が多くいる。辛い思いをしても学校に来る楽しみがあれば...』

ブータンの多くの僻地の学校では、五十年程前の日本と同じで、子供達を夢中にさせるスポーツや音楽をしたくて

も満足な道具がない状態である。幸いな事に提供品をJICAが輸送費を負担して在外事務所まで届ける。世界の笑顔のために”というプログラムのあり、出身地の八千代市役所を通して善意ある市民や中学校から集められたスポーツ用品楽器が届けられた。在外事務所からは学校までは私が車や馬を使って運搬したが、待ち受けていた子供達のはじけるばかりの笑顔を見た途端に、私の頭にサンタクロースの姿が浮かんだ。

豊富な物が当たり前で育つ日本の子供達、物質的に貧しいながらそれらを大切に使うて育っているブータンの子供達、どちらが幸せなのだろうか？そして多くの日本人が忘れてしまっているものを持ち続けているブータンの人々。GNPをもじって先の国王が唱えられたGNH(国民総幸福)を目指すブータン国。ただ残念ながら、物質主義の先進国の押し付け援助あるいは資本主義の弊害の為、地球最後の秘境”と云われまた私達日本人のルーツの可能性のあるこの国も徐々にではあるが変化させられている。

二年間の有意義なSV活動を終えた今、援助のあり方を考えると共に、シニア海外ボランティアの意義を広く知ってもらおう事の大切さを実感している。

### サンニコラス市に赴任して

黒須英典（アルゼンチン）

アルゼンチンの小さな都市サンニコラス市で二〇〇四年十月から二年間IAS(アルゼンチンの製鉄協会)で鋼板製造及び品質管理の指導を実施し二〇〇六年十月に帰国した。

アルゼンチンでは年間約五百万トンの粗鋼がシデラール(高炉―転炉)、アシンダル(直接還元炉―電気炉)、シデルカ(直接還元炉―電気炉)の三社で製造され、鋼板やパイプ、丸棒、線材等のロ

ングプロダクトが生産されている。鋼板とロングプロダクトの生産比率はロングプロダクトが若干多く、農業や牧畜の柵用線材、建設資材の需要を満たしている。鋼板はシデラール社が熱延鋼板、冷延鋼板、亜鉛めっき鋼板、錫めっき鋼板を製造し、主に農業機械設備、建材、容器に使用されている。自動車への需要はこれからという時期にさしかかっている。

アルゼンチンの自動車生産はUSAやヨーロッパ系の外資系メーカーで生産され二〇〇五年には三十二万



台の生産であった。自動車のドア、フエンダーなどはノックダウンで組み立てられていたが最近になりシデラール素材が試作されるようになってきた状況である。

製品の品質は介在物系の問題が多く、設備を含めた改善が望まれる。私の活動はIASの技術者とシデラールの技術者の支援であり、これらの技術者の意向に沿って進め、お役にたてたと思う。

生活は直接異文化を肌で感じ、対応する日々を終始した。サンニコラス市は一七四八年にできた古い町で人口十二万人、アルゼンチンの主要製鉄会社が存在する製鉄所の町、主にヨーロッパからの移住者とその子孫が自分の生まれ故郷として地道に生活している地方都市である。

鉄道路線はあるものの貨物専用で旅客輸送は廃止され、長距離バスが発達している。市内の交通手段はバス又はタクシーである。市内はシデラール社員の三交替出勤退社のための専用バスが一般乗り合いバスに混じって行き交っている。

市内には商店街があり市民生活に必要なものは何でも購入できる。どの商店にも中国製商品があふれ、市民の関心は日本より中国にあり、興味を持った人たちが中国語を勉強している。

どの家庭にも住居の一角に焼肉用の炭焼きカマドが備え付けられている。家庭では家族主義に支えられ、週末は家族が両親の家に集まり、炭焼きカマドで焼肉パーティーを行い家族の絆を深めている。市民の一般的な週末の過ごし方である。

各家庭には犬が少なくとも一匹は飼われており犬好きであり、庭に放し飼いされている。家には防犯センサーが設置されている。特別に治安問題があるわけではないが貧しい人たちの共存の中で警察の対応は悪く、物品が盗まれたぐらいでは動いてくれない。盗品は絶対戻らない事実に対し住民は自己防衛に心がけ、自分の身は自分で守ることに徹している。

各家庭の夕食はおおよそ九時頃からである。夕食のレストランの開店は八時頃である。レストランには老夫婦連れ、客が多く夜遅くまで元気な姿が印象的である。夜のパーティーなどもこの時間に合わせ時間が設定され、開始時間は目安として解釈され、おおよそ三十分遅れで人が集まりだす。これをアルゼンチン時間と笑い、何かにつけ時間に遅れた場合の理由としている。時間にはおおらかである。

市立大学の授業料は無料のためなのか大学教授は生活のために別の職業を持つている。公共病院での医療費は無料。

レディファーストがいたるところで展開され、女性は女王様気分をご満悦ではと思う。

長距離バスは日本の様に単に乗車券を購入して乗るというわけにはいかない。パスポート又は労働証明書の提示が必要。安全確保のために乗車券購入時義務付けられた規則とのことでアルゼンチン人も購入時に何やら番号と氏名を名乗っている。この番号は日本の住民票コードと同じである。生まれた時に、両親の番号に付加して設定され、一生変更できない個人コードである。クレジットカードの暗証番号やインターネットのパスワードに利用している。

異文化の一端を紹介してきたがそこに住んで肌で感じているとその異文化をそのまま受け入れ生活できるもの。このような貴重な機会を得たことに対し、JICAおよび世話になった配属先の皆様から感謝する次第である。

**チュニジアの空**

佐山清司(チュニジア)

二〇〇六年十一月にチュニジアでのボランティアを終え



帰国しました。アフリカの地・イスラム文明・アラブ人社会と日本と

は生活・文化・習慣の異なる地でのボランティアは大変な驚きでした。日本においても種々のボランティア活動を手がけてまいりましたので相手側への入り込みのノウハウを多少は承知している積もりでした。

チュニジアといえば、フェニキア人による地中海の古代都市カルタゴとその時代の勇猛なハンニバル将軍が皆様に歴史的に想いだして頂けるでしょう。

この地は過去二〇〇〇年以上にわたり他民族・異教徒・周辺敵国に寄る侵略・殺戮・略奪・改宗が連綿と続いてきた土地柄であります。現在の共和制の国家も何時転覆するかは知る人ぞ知る状況でしょう。既に大統領の色々な不穏な噂が街中のカフェーで取り沙汰されております。

チュニジアの多くの地域が砂漠地帯であり、私のボランティアの任務はその砂漠の中に点在しているオアシス地方都市での零細企業支援でした。

年間通じて各地方都市を巡回して、各地の大学の教授や地方役人への指導と地場産

業の経営者への直接アドバイスを繰り返してきました。この地で初の長期間にわたる起業支援の成果が評価され、私の後任として三名のボランティアが現在活動中です。また、時にはSV三名の短期応援派遣を受けております。

私の妻はアラブ人家庭へ完全に入り込み、その家族の一員として料理を作り、食事・お茶の時間を共にしておりました。特に圧巻だったのはその家のお嬢さん三名が次々と婚約・結婚してその度にアラブ人特有の見栄っ張りな気性が織り成す盛大なイベントに家族の一員として参加することが出来たことです。

婚約には相手の家族一族が押しつけてきて夜中に近い時間帯に家族紹介を長々とする。当然アラビア語です。で、我々夫婦には皆目分らない会話の渦の中で彼らの話題の流れを感覚的に探りながら、時々こちらから我々が分かる話題へ切り替えてみました。

結婚式は予定時間より二時間程度遅れは普通で、その開始時間は真夜中の十一時半からにもなっています。普通、結婚式は酒なし・食事なしで延々と三、四時間続きます。

現地の人結構日本のお茶に興味を持つので、夜中にお茶のお手前をして見せたり、

日本のお菓子を食べてもらったりしながらアフリカの時間を共有することを楽しみました。

異文化交流には多くの誤解が生ずることを体験しました、というより我々の先入観が勝手な思い込みを強めているのだと感じました。彼らの行いが何故それ程にまで極端なのかの推察を巡らすより、そのままを受け入れて己をその中に沈みこめることが良いということを感じ知らされました。

毎朝チュニジアンブルーの青空の下で朝食を取り、チュニスの街へ車で出勤するときにはアラブの喧騒の街中を、演歌を聞きながら気持ち落ち着けて運転していたものでした。

**現地便り**

**俳柳アラビアンナイト**  
北垣勝之(ヨルダン)

ヨルダンはアカバに着いて雀より  
アザーンに目覚む旅の宿  
(アザーンはイスラム教のお祈りへの呼びかけ)  
アカバ蚊の  
熱き歓迎いざ勝負  
(シヨウブはアラビア語で暑)

い)

紅海に  
来ては後悔先立たず  
(アカバは紅海最深部の港町)

月みどり  
御伽の国の夜景かな  
(アカバの月は緑色に見える)

○アカバの乾期は暑い熱いアラビアの  
真昼人無き暑さかな  
人も無き  
焼け付く街路わが大地

灼熱に  
鳳凰木の朱花燃ゆる

肌を焼き  
心を燃やす夏冥利  
ソーラーハウス  
蛇口ひねればアカバスパ  
(家は熱せられ蛇口からは熱水)

インシャアツラー  
干天乾土慈雨待たる  
(マタルはアラビア語の雨)

○アラビア語と格闘  
夜毎見る

星の数ほどアラビア語  
(満天の星、アラビア語もアラビア語

五つ覚えて六つ忘る  
ミンナホーン  
ここから始まるアラビア語  
(ミンナホーンは「ここからの意味」)

遅すぎた  
ハタと気がつく間違いに  
(ハタとは間違いの意味)  
沙漠行く  
らくだ邪魔るだ馬悲惨  
(アラビア語でらくだはジャマルダ、馬をヒサンという)

○ハイ・イイェ  
アツラーも戸惑うナンムとラツ

(ナンムがノーでなく「ハイ」、ラツが「ノー」)  
わが職場  
所員万来談話室  
(所員との会話でアラビア語を習得)



写真右端が筆者

○JICAとともに

面白うJICAと歩む  
六十路かな

(気が付けば六十台はJICA Aとともに歩んできたようだ。JICAには、心が若く「Jeune」、親しい「Intime」、多くの仲間「Copain」や友達

「Ami」ができた。それだけでも面白いことではないか。JICAをフランス語でまとめた。)

【編集部注】

北垣勝之氏は現在ヨルダンのアカバ市にあるアカバ職業訓練校に赴任中。学校運営について校長をサポートする任について居られます。

表題の俳句とは俳句と川柳を合わせた北垣氏の造語です。

内地便り

「地域活動とSVの会」

四街道市 影山 洵

私は、平成十七年一月上海留学から一年ぶりに帰国しました。その前はジャマイカ、サモアにJICAのシニア海外ボランティア調整員として五年間赴任していました。六年ぶりの日本暮らしで、先ず最初にやってみたかったのが地域密着の活動でした。接点として先ず地元四街道市の国際交友の会に入り、地元の外国人の日本語学習支援活動に参加しました。その後、地元でのいろいろな交流と親睦の機会に恵まれました。六月には四街道市主催の第一回国際理解講座「海外シニアボランティアってなあに？」に講演依頼があり、日本と外国と

の文化の違いについて話をしました。

四街道市では国際交流の気運が高まっているところであり、多くの活動参加の機会がありました。十月には市民文化祭で「千葉県JICAシニアボランティアの会」のブースが用意されました。そこでJICA国際協力推進員と共に「オールJICAの紹介」、「当会の紹介」およびスタートしたばかりの「国際理解教育（開発教育）」の広報活動をするのができました。

市の国際交流事業も第二弾、第三弾と拡大し、十二月には外国人国際交流事業第四弾として、市民と在住外国人との意見交換会に参加、続いて市内の十カ国から来ている外国人家族、市民とのお国の郷土料理持ち寄りのポットラックパーティーの総合司会を依頼されました。



ポットラックパーティで司会中

当日は五十人の仲間が集ま

り、楽器演奏、歌、ゲームなどで相互の親睦をはかることができました。

十二月六日には交流友の会の会員および市内五カ国の外国人と一緒に四街道小学校を訪問し、三年生百五十人と父兄を交え、外国のゲームを通じた文化紹介と交流会に参加することができました。学校の講堂では、じゃんけん、縄跳び、など様々なゲームを持ち寄っての立体的な交流会を持つことができました。ゲームのあと生徒たちと食べた給食はことさら味わい深いものとなりました。



給食に参加

当会の「海外の経験を市民に紹介する開発教育の運動」が地域活動と密接な活動展開をしており、地域在住の外国人と市民との快適な生活環境づくりに欠かせないという実感を味わっています。

第二回 帰国報告会 開催

平成十九年三月四日(土)午後一時から四時迄浦安市国際センターで本年度第二回千葉県JICAシニアボランティア帰国報告会が開催されました。

JICA、千葉県JICAシニアボランティアの会と浦安市国際センターの共催で実施され、平成十八年帰国の八名の会員から任国での活動状況、現地の生活風俗の紹介、異文化遭遇体験などの報告が行われました。冒頭、当会品川会長の挨拶の後、各報告者のパワーポイントによる豊富な映像をもとに熱心な報告と質疑応答がなされました。



丸山 弘氏の報告

参加者は一般市民、帰国ボランティア、千葉県JICAシニアボランティアの会員および家族・知人の方々約四十人で会場はほぼ満席となり

ました。報告は一人十五分、質疑五分という長時間で行われましたが、豊富な内容と活発な質疑で時間が足りないくらいでした。参加者からは「パワーポイント画像を利用しての説明で、判り易く良かった。」

・八人の報告者の派遣国がまちまちで、各地の文化や生活状況がよく判った。

・シニア海外ボランティアの実状が良くわかった。などの声が寄せられました。また改善点として、発表時間をもう少し長くという声もあり、発表者に対して、苦勞した点をもっと知りたかった、女性がどんなボランティアが出来るか知りたかった、などの要望も寄せられました。

最後に浦安市国際センターの伊東所長の挨拶があり、その後、報告者、参加者、主催者との懇談会に移行しました。



国際センター 伊東所長の挨拶

当日の報告者は以下の通りです。

- 丸山弘氏 (マレーシア / クチン市産業訓練校 / 工作機械技能・訓練教材開発 君津市)
- 竹花晃氏 (ネパール / 国際山岳博物館 / 山岳博物館 運営 / 印西市)
- 白鳥貞夫氏 (バヌアツ / バヌアツ商工会議所 / 経営管理 柏市)
- 津田正臣氏 (ヨルダン / 王立科学院機械設計・技術センター / 金属腐蝕 千葉市)
- 横田勝徳氏 (モンゴル / 品質標準センター / 食品検査 / 千葉市)
- 及川淳一氏 (ドミニカ / ドミニカ共和国農地庁 / 建設機械維持管理 / 船橋市)
- 黒須英典氏 (アルゼンチン / IAS / 鋼板製造 / 船橋市)
- 加藤哲男氏 (ペルー / 国立職業訓練所 / 食品衛生管理 流山市)

「編集部より」

竹花晃氏、白鳥貞夫氏、津田正臣氏、黒須英典氏の報告の一部は会員投稿欄四七頁に掲載されており、残りの報告者につきましては次号に掲載の予定です。

新派遣者県庁表敬訪問

JICAシニアボランティア平成十八年度春募集派遣者の九名の方々が昨年九月二十九日(金)に表敬のため県庁を訪問しました。



写真中央は千葉県総合企画部 中澤理事

全員が初めてのシニアボランティアです。JICAから松本業務グループ長、大山国際協力推進員が、当会から品川会長、上田事務局長、増田幹事が同席しました。

また、三月二十二日(木)には平成十八年度秋募集派遣者八名の方々が千葉県総合企画部 中澤理事を表敬訪問されました。なお、当会の五名の方々が再派遣者として赴任します。JICAから社会還元ボランティアチーム 三義望氏と木野本国際協力推進員が、当会から品川会長、黒田副会長、上田事務局長が同席しました。

千葉県主催「国際交流協力ボランティア養成講座」に講師派遣

千葉県では三月十五日と三月十七日に国際交流協力ボランティアの活動促進とこれからボランティアを始めようとする個人の啓蒙のために養成講座を開催されました。

堂本暁子CCB会長より十七日午後の養成講座に、当会の活動紹介のための講師派遣の依頼があり、それを受けて白鳥貞夫会員(バヌアツ、柏市)、堀端俊雄会員(ラオス、我孫子市)、山本幹事(バラグアイ、千葉市)を派遣いたしました。



白鳥会員の講演

当日は二十一名の聴講者があり、千葉県民の国際協力ボランティアへの関心の高さがうかがえました。

国際理解教育(開発教育) 活動状況

開発教育推進計画の策定

当会規約では第二条に「千葉県内の国際理解・教育活動に協力する」と定められております。この活動のさらなる推進のため、昨年五月に開発教育推進計画が策定され、増田定雄幹事をリーダーに影山、片岡、木村、斎藤(富)、寺戸、堀端各会員をメンバーとする「千葉県JICAシニアボランティアの会・国際理解教育(開発教育)小委員会」が発足しました。



定例会で増田定雄代表世話人が報告

数回に及ぶ検討会の結果、提案書、小委員会取決めを策定し、二〇〇六年十月末で小委員会を発展的解消、同十一月一日より「国際理解教育(開発教育)活動」が発足しました。運営は国際理解教育(開発教育)世話人(代表世

話人 増田定雄幹事、世話人 影山・斎藤(富)各会員)が中心となつて行ないます。

派遣講師陣への会員登録者は現在二十名です。随時受付を行なっておりまして、講師登録をご希望の方は増田幹事までお申越しく下さい。詳細は当会ウェブページの「教育提案書」ページでご覧頂けます。

現在までの開発教育(国際理解教育)推進のための紹介先は次の通りです。

【千葉県】 千葉県総合企画部、千葉県教育庁、千葉県国際交流センター長、ちば国際コンベンションビューロー

【千葉市および周辺市】

総務局市長公室 国際交流課、国際交流協会、生涯学習センター

小中台公民館、稲浜公民館 千城台公民館、幕張公民館 松が丘公民館、誉田公民館 轟公民館

【八街道市】

教育委員会、教育総務課、生涯学習推進室

【八千代市】

国際推進室、広報公聴課

【柏市】

国際交流室、柏市市民活動促進課、柏市中央公民館

【八街市】 社会教育指導員課 (各種学校) 神田外語大学

本活動に対する皆様のご参加とご支援をお願いします。

出前講座

次の各会員が出前講座を実施しました。

田辺光宏会員

十月十八日(水) 八街市生きがい短期大学 「メキシコと日本の歴史関係」

海外シニアボランティアとはどういうものかという体験談や戦国時代からのメキシコと日本の関わりを、知られざるエピソードを交えて講演しました。

及川淳一・大西周作両会員

十一月十八日(土) 日本ユニセフ協会千葉支部 「海外でのボランティア活動について」

任地でのシニアボランティア体験に加え、現地での廃棄物処理対策、女性の社会進出状況、子どもの死亡率の高さなどの講演を行いました。

小学校授業

白鳥貞夫会員

二月一日 柏市立第八小学校(久保田校長)

ゆとり教育「世界の国々を知ろう バヌアツつてどんな国」の授業を四年生全員百四十三人を対象に担当されました。第四時限に体育館でパワーポイントによる映像と現地衣装を使用した授業でした。生徒達は熱心に受講し、捌ききれない位の質問も出て、



活気あふれた四十五分間でした。日本とあまりにも違う現地の生活に興味津々で、電気もガスも無くても幸福度世界一という国をぜひ訪れたいという声も上がりました。

シニアボランティア向け開発教育ワークショップ実施

当会会員の開発教育(国際理解教育)に対する理解を深めるため、JICA千葉県国際協力推進員の主催で十一月四日にCCBにERIC国際理解教育センターより講師を招きワークショップが開催されました。当会会員、一般参加者計約二十名が参加しました。



開発教育(国際理解教育)ワークショップ

【タイトル】 開発教育(国際理解教育)って何だろう 海外経験を地域社会、学校教育に取り入れるためには(講師) ERIC 佐藤玲子氏

会員活動紹介

JICAシニア海外、日系社会シニアボランティア募集「体験談&説明会」への協力

平成十八年度秋募集説明会がJOCA（青年海外協力協会）の主催で船橋市と千葉市で開催されました。当会から次の諸会員が参加しました。

船橋会場

十月十四日（土）  
十時半～十二時半  
船橋市中央公民館  
（パネリスト）  
中島敏雄氏  
（バプアニューギニア、市場開拓・輸出促進）  
〈よろず相談員〉  
福井凱男氏  
（アルゼンチン、貿易）  
河合祥雄氏  
（チュニジア、総合地域開発計画）

参加者は約八十名で昨年より少なく、粛々と進行しました。

千葉会場

十月二十六日（木）  
十八時半～二十時半  
千葉市民会館  
（パネリスト）  
齋藤健氏  
（ニカラガア、建築・住宅）  
寺田博義氏  
（タイ、環境処理）

〈よろず相談員〉  
齋藤富貴子氏  
（日系ブラジル、日本語教育）  
大西周作氏  
（ボリビア、産業廃棄物処理）

参加者は約六十名でした。

各地の国際フェスティバルに参加

昨年度に続き各地で開催された国際フェスティバルにブースを出展し、当会の活動、JICAシニア海外ボランティアの紹介を行いました。

○四街道市「平成十八年度市民文化学びの祭典」  
十月二十九日（日）  
十時～十六時



四街道文化センターにおいて、市内の十団体参加の祭典

に出展し、当会活動紹介とS V、JOCV（青年海外協力隊）募集資料説明と相談、国際理解（開発）教育関係の資料説明を行いました。この文化祭には、同市在住の影山洵会員の尽力で今回初めて参加したものです。ブラジルからの来国者の多い土地柄を考慮して、ブラジル日系社会ボランティアとして赴任していた齋藤富貴子会員によるブラジルの紹介、国際理解クイズと南米で有名なマテ茶のサービが行われ好評でした。

大山国際協力推進員のほか当会からは影山洵、齋藤健・富貴子各会員、役員側から品川会長、上田事務局長、山本茂穂幹事が参加しました。

（編集部注 八頁に影山会員による関連記事が掲載されております。）

○東葛飾地区「国際交流のつどい2006」  
十一月十二日（日）  
九時～十四時

県立手賀の丘少年自然の家において、自然の家まつり・国際交流のつどい実行委員会主催のもと、当会のほか我孫子市、柏市、流山市、野田市、鎌ヶ谷市の国際交流協会が参加し盛大に挙行されました。

当会からは岩谷宏司氏と黒

田、泉岡役員および大山国際協力推進員が参加しました。国際理解クイズと各国の民芸土産品が来場者の興味を惹き、シニア海外ボランティア募集相談にも応じました。



○浦安市「国際交流・協力フェスティバル2007」  
一月二十一日（日）  
十時～十七時

浦安市ショッピングプラザ新浦安において開催されました。当会はボランティア活動写真パネル、JICA事業紹介パンフレット、国際協力クイズ、ボランティア相談コーナーを設け多数の参観者に対応しました。

実行委員会の委員長に宮崎泰（浦安市）が就任され、計画当初から実施にいたるまで大変「尽力」されました。当会からの参加者は佐山清

司、河合祥雄、及川淳一各会員と品川、梅谷、黒田、山本、後藤の各役員でした。本会ブースにはJOCV千葉OB会も協力出展されました。



ステージではJOCVのジバンブエ音楽隊員OBによる楽器演奏と歌、踊りが披露され注目をあびました。



○千葉市「ちば市国際ふれあいフェスティバル2007」  
二月二十五日(日)  
十時～十六時

千葉市センシティブタワーにて開催されました。主催はちば市国際ふれあいフェスティバル運営協議会で、JICAも後援しました。参加は当会ほか三十九団体の多きを数え、休日と立地の利便性の良さから終日大変な賑わいを見せました。

当会も十二階にブースを設け、SVの現地活動写真パネルの展示、シニア海外ボランティア募集パンフレット、当会概要、会報、JICA事業紹介、国際理解クイズの実施など盛り沢山の展示を行いました。沢山の人が来訪し、終了時間を待たず用意された資料、景品など品切れ状態となるくらいでした。

JICAからは大山美砂子、木野本まゆみ(新任)国際協力推進員が、当会からは品川、梅谷、黒田、上田、山本、後藤各役員が参加しました。

### JOCAの新年交歓会参加

一月二十七日(土)

十六時～二十時

JICA地球ひろばにおいてJOCA(社)青年海外協力協会)の盛大な新年交歓会があり、当会からは品川会長と黒田副会長が参加しました。

教育関係講演会(講師 杉並区立和田中学校 藤原和博校長)と交歓会に併行してOB会活動展示会が開催され、当会もシニアボランティア現地活動パネルなどをJOCV(青年海外協力隊)千葉OB会と一体となって展示しました。

### 平成十八年度千葉県ボランティア家族連絡会に参加

十二月二日(土)

十三時半～十六時

千葉市プラザ菜の花において、JICAの主催、青年海外協力隊千葉OB会と当会の共催で開催され、青年海外協力隊・日系社会青年ボランティアの家族が四十名、シニア海外ボランティア家族一名が参加されました。

主催者側を代表して館JICA地球ひろば連携促進チ

ムの挨拶の後、OB会吉田会長と当会品川会長の挨拶と来賓(千葉県庁、協力隊を育てる会)の紹介がありました。

OB・OGの自己紹介は冒頭に任国の現地語で今日は、今晚の挨拶で始まることを義務づけられました。



OBの活動報告として、シニア海外ボランティアからは小久保亮一会員(ヨルダン)が映像、調査図表を使って家族の皆様を紹介を行いました。

終始なごやかな雰囲気です。留守家族の方々も不安を軽減し納得して帰られたことと思われま。当会からは説明者として出席家族の派遣国に合わせ、中島敏雄氏(パプアニューギニア)と福井凱男(アゼルバジャン)の両会員と品川会長以下役員が参加しました。

### CCB便り

JICAの千葉県国際協力推進員が三月一日付で大山美砂子さんから木野本まゆみさんに異動になりました。

大山さんは平成十六年に就任され、このたび三年間の任期を満了されました。ご在任中は終始、熱意を持って当会をご支援頂き、JICA、千葉県、当会間の連携・協力を図って頂きました。誠に有難うございました。今後の活躍を祈念いたします。

### 【大山さんのメッセージ】

SV会役員の皆様  
三年間お世話になりました。とても楽しく推進員の活動が出来たのも皆様のおかげと思っております。

今後ともご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

### 【木野本さんのメッセージ】

はじめまして。二月に千葉県の国際協力推進員に就任しました木野本まゆみです。協力隊員時代はカンボジアで音楽を教えていました。

楽しく国際協力を千葉県に

### 編集後記

広めていければ、と思っております。よろしくお願ひします。

なお、木野本さんの連絡先は従来の国際協力推進員の連絡先と同じです。(本段左端をご参照ください)

(山本茂穂)

会報第六号をお届けします。本号は会の活動発展とともに掲載記事が増え、十二頁建て全面オフセットカラー印刷としました。

定例会での金子青年海外協力協会会長と中沢千葉県政策調整担当部長のご講演は、今後の当会の活動、シニアボランティアとしての気持ちの持ち方について示唆に富むものであると思われま。

今後、会報には地域社会での会員の活動内容を積極的に掲載し、社会の人々のご理解を深めたいと考えておりますので、よろしく皆様のご協力をお願いいたします。

(黒田昭太郎)

本紙へのご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会  
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)  
04-7131-5830(黒田)

千葉県国際協力推進員  
043-297-0245(木野本)  
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp